

臨終図巻

ドクター和のニッポン



長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

306

元プロ野球選手 中西太

僕の一番の趣味はゴルフです。もうすぐ65歳になり晴れて高齢者の仲間入りをしますが、ゴルフ場に行けば65歳なんてまだまだ青二才。一緒に回っている方の中には80代、90代の猛者がたくさんいて、僕よりも快活にプレーを楽しんでいます。

ゴルフに限らず、何かしらのスポーツを続けている人は男女問わず皆さん、いつまでも若々しい方が多いです。屋内ではなく、日光のあたる場所でのスポーツは、より若々しさを増してくれます。もっと言えば、マラソンなどの孤独なスポーツよりも。誰かと一緒に笑いながら楽しめるものもいいでしょう。日光と仲間と語るひとときが、老いのスピードを緩めてくれる気がするのです。

この人のこともテレビで拝見するたび若々しい人だなあ、と感じていましたが、思えば最近、拝見しなくなっていました。

西鉄ライオンズ黄金期に強打の内

晩年まで若々しかった「怪童」



野手として大活躍。高松市出身だったことから「四国の怪童」と呼ばれ、西鉄、日本ハム、阪神などで監督を務めた中西太さんが、5月11日

に都内の自宅で亡くなりました。享年90。死因は心不全との発表です。

90代の方が自宅で亡くなり、その死因が「心不全」となるのは、珍しいケースではありません。最期は誰でも心臓の機能が低下し、やがて死に至るわけですからどのような病態であっても「心不全」と死亡診断書に書くことがあります。ご家族が「がん」や「認知症」とは書いてほしくない并希望されることも、ときどきあるのです。そう、死亡診断書の「死因」は、医師が独断で決めるものではなく、特に在宅で亡くなられた場合、残されたご家族のお気持ちも鑑(かんが)みながら決めます。死は、死んだ本人のものかもしれませんが、死因とは、残された人たちのためにある社会的病名なのかもしれないな、と思うときが増えて

きました。

さて中西さんといえば僕が思い出すのは5年前、2018年の夏の甲子園。全国高校野球選手権大会第100回の記念として行われた〈レジェンド始球式〉での1シーン。

当時85歳だった中西さんの投げた球は、なんとノーバウンドでキャッチャーミットに収まりました。85歳でノーバウンド!これはすごいことです。「私は本番に強いんだよ」と余裕の笑みを浮かべていましたが、日々トレーニングをしていなければ無理な話。中西さんは翌年の19年4月にも、メットライフドームでの西武本拠地開幕戦の始球式で投げています。このときはワンバウンドし、「なんとか投げられた」と少年のような笑顔を見せてくれました。

座右の銘は、何苦楚(なにくそ)。自分で限界を決めないこと。それが若さの秘訣(ひけつ)かもしれません。